

県中教研 美術部会だより

第 35 号

発行日 令和2年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 濱本 良子
題 字 金山 泰仁 先生

美術の授業で大切なこと

指導主事 伊勢威知郎

私は中学校で、必ず毎学期の最初の授業で「自分の手のデッサン」を課題にしていました。1年間（3学期分）で3枚、3年間で通算9枚の自分の手を描くことになります。手は「第二の顔」といわれています。顔ほどの表情は出せませんが、ポーズによって優しさ、力強さ等感情表現ができます。したがって、自分の手を描くことは、自画像を描くことと同様に捉えることができます。卒業時にスケッチブックを振り返ると、9種類の“手の姿”を通して、自分自身の成長が見て取れます。「美術の卒業アルバム」です。

ある日、手のデッサンの時間に、私が机間指導をしていると、一人の生徒がサッと自分の手を隠しました。「どうしたの？」と声をかけると、その生徒は「自分の手は荒れてカサカサで汚いから恥ずかしい。絵に描きたくない。」と言いました。授業中、その生徒のペンはほとんど動くことがありませんでした。後から知ったことですが、その生徒は家庭の事情で、幼い弟妹のために、日頃から炊事や洗濯等の家事をよくしていたそうです。

次の授業で私はその生徒に言いました。「自信をもって、自分の手を慈しむように丁寧に描いてください。そして自分らしく。」と。

その後、でき上がった絵は、その生徒自身の生き方を映し出したかのように、力強く、かつ繊細に表現された素晴らしいものになっていました。

美術の授業で大切なこと。それはまず、「見た目のきれいさだけではない真の美しさとは何か」を生徒自身に考えさせることではないでしょうか。その上で、生徒一人一人のよさや個性が発揮されやすいという美術科の特性を生かし、表現や技能、鑑賞の資質・能力に関する指導が必要になってくると考えます。

AI（人工知能）等の発達により、物事の価値や心のありようが急速に変化しています。しかし、人間らしく、心豊かな生活を創造していけるように、これからも生徒たちの未来に希望をもって、美術教育を研究・実践していきましょう。

（東部教育事務所）

生徒のよさを見付ける。認める。

県部長 濱本 良子

多くの人々との出会いの中で、30年余り前、私は美術科教員免許を取得しようと決めた。特に影響を受けたのは、私の祖父と小学校高学年のときの担任・高井先生である。

子供の頃、家にあった廃材と釘でいろいろな物を作った私に、祖父は必ず「良子は上手やなあ」と褒めてくれた。何を作っても褒めてくれるので、気をよくした私は、物を作ることがますます好きになった。

高井先生は、版画家としての一面をもっておられた。漁港での写生、読書感想画、版画等、様々な題材に取り組んだ。「何だかおかしいな」と思いながら描いていると、先生がアドバイスをくださる。そのようにしてみると、とたんに絵が生き生きとし始める。「先生はすごい」と、憧れと親しみを覚えた。

新学習指導要領の教科の目標(3)は、「美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う」である。これは、育成することを目指す「学びに向かう力、人間性等」を示しており、教科の目標(1)(2)に関する資質・能力をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であるといわれている。東良調査官は「美術は好きな生徒だけが面白い授業や、専門の道に進む生徒だけの授業ではなく、全ての生徒が生活や社会の中にある美術や美術文化と豊かに関わる力を、中学校3年間の中で養わなければならない」と話しておられる。美術が好きな生徒も苦手意識をもっている生徒も、「美術っていいな」と感じることができるよう、研鑽を積み、生徒の表現や取組の中から指導要領の視点でよいところや成長を見付けて認めたり、的確なアドバイスをしていきたいと思っている。

（氷・南部中）

第63回中学校教育課程研究大会

東 部 地 区

富山市立八尾中学校

研究授業は、佐藤寛子教諭による、第2学年「心をつなぐ贈り物 ～世界に一つのラッピング～」を題材に行われた。

大切な人に贈り物等を渡すときに和紙や布、藁等で包み、そこに特別な気持ちを込めてきた日本の伝統を踏まえ、包む形の美しさで「礼」の心を表現できることを学び、自らも大切な人に贈るための「和紙を用いたラッピング」に取り組むという題材であった。八尾町は紙の工芸館「和紙文庫」と紙すき体験ができる「桂樹舎」があり、おわら風の盆に全国から観光客が訪れるなど、文化や伝統を大切にしている地域性がある。生徒は「和紙文庫」を見学したり、「桂樹舎」で紙すき体験をしたりして、和紙の特徴や種類、和紙づくりの方法や苦労について学んだり、和紙の美しさやよさを感じたりした。そして、地元の八尾和紙を生かすラッピングはどうあればよいかを、試行錯誤しながら制作を進めてきた。

本時は、「贈る時期」「渡すシチュエーション」「相手をイメージする色」等を言葉やアイデアスケッチ、試作品で練り上げたこれまでの制作を踏まえ、級友同士で相談しながら、自分の思いを伝えるのによりふさわしい紙の折り方や包み方、重ね方等を考え、制作を進める展開だった。

部会協議①では「紙漉きの体験はもとより、地元でつくられたものを活用するという一連の流れは、『生活に生かされる美術』の学びが深まる素晴らしい実践であった」「プレゼントを一部見せ



る包み方を紹介することで、表現の幅が広がった」「折り方や包み方の和紙の扱い方、接着の方法、

はさみを用いて切ったり、折り目を付けた後水を含ませてちぎったりする切断の方法、水引きの活用等でアイデアの幅をもたせることができ、とても可能性を感じられる題材であった」「水引きがカラフルで、和紙の白さに映えていた。しかし、細いため、組紐やミサンガのように編み、より映えるように工夫する生徒が多かった」「作品を試行錯誤しながら折っていると和紙がよれてくるので、評価が難しいのでは」等の意見が出された。

部会協議②では、地区代表による2名から発表があり、映像やパワーポイントを用いて日頃の実践の一部が分かりやすく紹介された。興味深く示唆に富んだ発表となり、若い教師の発表に対して多くの会員がアドバイスをする雰囲気があり、心強く感じられた。

最後に、東部教育事務所の伊勢威知郎指導主事からは、「生徒同士仲がよい。お互いに自由に鑑賞し合って制作に生かしている姿が印象的であった」「これまでの授業の流れや既習事項の展示等もされており、生徒が制作に向かうための環境整備がすばらしかった」「教師の教材研究の熱心が伝わってきた。生徒の制作意欲につながっている」「自分が困っているところを話すことで、よい話し合いになる」とのご指導をいただき、会員一同、自分の指導方法を振り返るよい機会となった。

梨木 剛範 (下・入善中)



美術部会 10月16日(西部) 17日(東部)

西部地区

小矢部市立大谷中学校

畠山雅弘教諭が「絵の中に入り込もう」という題材名で、ノーマン・ロックウェル「近所に新しく来た子どもたち」の鑑賞を行った。①作者の表現意図と工夫について考え、見方や感じ方を広げることができる作品の選定、②〔共通事項〕を踏まえ、生徒が感じたことの根拠を明確にさせる指導の意識化、③鑑賞の資質・能力を高めるための、言語活動における学習形態やワークシートの内容の工夫等、3点に重点を置いた授業が構成されていた。授業者は、「直感的鑑賞」「分析的鑑賞」「総合的鑑賞」の3段階をイメージし、最初の第一印象から、徐々に鑑賞が深まっていくよう、授業の流れを設定していた。

協議会では、「白人と黒人の対比が分かりやすくなるよう、板書構成が工夫されていた」「鑑賞の際、生徒の考えと教師が伝える情報のバランスをどう考えればよいか」などの意見が出され、活発な議論が展開された。

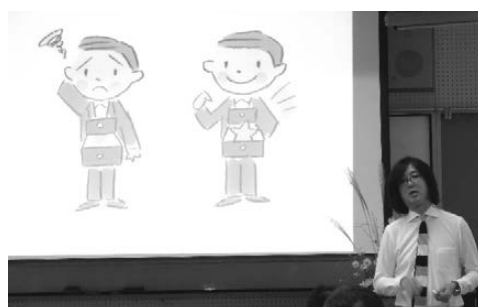
西部教育事務所の藤田みゆき指導主事からは、「1学期の鑑賞での既習体験(ブリューゲル「ネーデルランドの諺」)が生かされており、絵の細部を見ようとする素地がつくられていた」「大画面モニターに投影した絵に補助線を引くなど、視覚に訴える手立てがあった」など工夫された点について指導助言をいただいた。

また、鑑賞で大切な教師の役割として、生徒の



実態を把握した意図的指名の重要性、3年間を見通した鑑賞のカリキュラムを組むことにより、発達の段階に応じた深まりを目指すことなどについて示唆をいただいた。

授業力向上のためのアドバイザー配置事業では、文部科学省初等中等教育局視学官の東良雅人先生から、新学習指導要領における鑑賞の在り方についての講義をいただいた。そこでは、主に次の4点について、拝聴した。



- ①鑑賞の領域は、表現に比べ大人になったときに身近な存在となるため、中学校での美術教育が大切な役割を果たす。
- ②作品の情報をどこまで生徒に与えればよいか、ということについては授業者のねらいによる。ねらいに沿って教師が定めるべきものである。
- ③鑑賞を計画的にカリキュラムに位置付けながら、そこで培った能力が生かされるよう、意図的に表現題材を仕組む。鑑賞で育成された「見方・感じ方を深める」ことが表現にも往還的に生かされることが大切である。
- ④「身の回りにある美しさ」に気付くことができる生徒を育成する。「造形的な視点」を豊かにしていくよう、授業の中に仕組んでいく。など、学習指導要領改訂の時期に当たり、留意すべき点について多くの学びをいただいた。

終わりに、美術での学びは社会生活と密接につながっており、また、創造活動の喜びは、人を感動させ、情操を培い心を豊かにする。子供一人一人の学びと成長に寄り添った授業づくりを行ってほしいと締めくくられた。

藪 陽介 (南・福野中)

氷見市中教研美術部会・活動報告

(7月26日：氷見市実技研修会 8月1日：高岡市現地学習会)

氷見市中教研美術部会は、高岡市と協力しながら研修を進めている。8月には氷見市美術部会の部員3名が南部中学校に集まり、石彫の実技研修を行った。石彫の場合、色よりも形が重要になる。生徒の主題を形に表すための手立てを考えながら、滑石を数種類の道具を利用して加工した。生徒が扱いやすい粗彫りに適した道具はどれか、安全に彫り進めるための注意点等、実際に体験し、話し合いながら研修を進めた。磨く工程を終え、初めて目にする天然石の色合いの美しさに、完成の喜びを感じ、生徒にも創造活動の喜びを感じさせることができる題材であることを確認した。



高岡市美術部会の現地学習会では、梅かまU-meい館で細工かまぼこ手作り体験を行ったり、

高志の国文学館で学芸員解説の下「谷川俊太郎の宇宙」を鑑賞したりした。細工かまぼこ手作り体験では、鯛の形に用意されたかまぼこ生地の上に、白色、黒色、赤色、黄色、水色、緑色のかまぼこ生地を利用して着色した。あらかじめ決められている形を利用するので、形よりも色が重要になる。それぞれが描く模様は個性的で2つとして同じものはない。決められた条件の中でも、色の工夫の仕方によって表現の幅が広がることを実感した。この工場見学や細工かまぼこづくり体験により、身近な食品である細工かまぼこの造形的な美しさを考えることは、地域に深く根ざした伝統技術の美しさの発見につながった。「谷川俊太郎の宇宙」では、谷川俊太郎の言葉からイメージした展示が工夫されていた。言葉のもつ力とそれを更に引き立てる色や形がうまく融合し、谷川俊太郎の世界をつくっており、言葉のイメージを色や形に表現する楽しさを感じた。

これらの研修から、体験を伴う研修は美術部会だからこそ必要であり、貴重な学びの場であると感じた。ここで学んだことを、今後の題材開発や授業実践に生かしていきたい。

濱田 信子 (氷・西條中)

芸術系教科等担当教員等 全国研修会参加報告

10月8日、9日に東京で開催された令和元年度芸術系教科等担当教員等全国研修会に参加した。

初日の8日は、東京藝術大学の奏楽堂にて特別講演「伝統と革新」を聴講した。東京藝術大学音楽学部邦楽科の演奏から始まり、尺八奏者の藤原道山氏、琴奏者上条妙子氏による「春の海」の演奏、そして東京藝術大学澤学長と藝大アントニアーナ合奏団による音楽と映像のコラボレーション作品も拝聴した。また、野村萬斎氏の特別講演では、狂言という表現の「個性」と「型」というテーマを切り口に、現代の芸術教育現場に必要な「型」を大切に、「個性」を育てる教育について聴いた。

午後からは全体研修として文部科学省初等中等教育局視学官東良雅人先生より、今回の学習指導要領改訂に伴う新しい明示事項やその意味等を「芸術教育」という広い枠組みで説明いただき、新たな芸術教育の意義を学んだ。また、続けて行われた「中学校美術科、高等学校芸術科において新しい学習指導要領が目指すもの」と「育成すべき資質・能力と学習内容との関係を明確にした授業づくり」の2つの講演から、授業づくりを行う際の配慮すべき事項の具体や、新しい指導要領との関連等を詳しく理解することができた。

2日目は武蔵野美術大学三鷹ルームにて、武蔵野美術大学白石教授の指導の下、プログラミングによる実践研修が行われた。光センサーから光を感知して空間の光度に反応するシステムを構築するなど、これまで工学的な扱いであったプログラミング技術を美術現場でも応用できるような理論や知識を学んだ。

今回の全国研修では、新学習指導要領等の教員の目下に迫る課題から、令和の時代を生きていく子供たちの新しい学びの形まで、幅広く美術教育について知見を得ることができた。この研修で学んだことを現場で還元していけるように、今後も励んでいきたい。

石浦 志帆 (魚・西部中)